岡山県ＰＴＡ連合会会長賞

ぼくの挑戦

総社市立清音小学校
四年生　椎葉篤規

その日ぼくは　岡山理科大学の教室にいた。

「電灯を消してください。」

真っ暗な教室のだん上でかい中電灯を力いっぱいふって光らせた。ぼくの思いよとどいてくれ。どよめきと光の向こうにお父さんとお母さんの顔がはっきり見えた。今から多くの人の前での研究発表が始まる。ぼくの挑戦だ。

ぼくは理科が大好きだ。ある日科学漫画に磁石とコイルで発電し、電池がなくてもＬＥＤが光ると書いてあるのを見つけた。そのとき、ぼくは五年前の西日本豪雨を思い出した。夜に災害が起きたり、停電になったりしたときには明かりが必要だ。つねに災害に備えるのは難しいけど、もし電池のいらないかい中電灯ができたら突然の災害でも安心だと思った。あの時の記憶と今が結びついたしゅん間だった。

夏休みに入るとすぐに研究を始めた。でもぼく一人では難しい。豆電球とちがってＬＥＤは簡単には光らないと言うお父さんを説得し協力してもらった。磁石の数やコイルの巻き方を変えて何度も実験をくり返した。お父さんの予想を裏切り、ＬＥＤは明るく光った。でも、光ったら光ったで次はもっと明るく、もっと使いやすくと思ってしまう。期限ぎりぎりまで家族みんなで実験を続けてまとめた。大変だったけど、とても楽しい研究だった。

二学期が始まり少したった頃、担任の先生から、ぼくの自由研究が岡山県児童生徒科学研究発表会に選ばれたと言われびっくりした。発表は十二月三日。十月末までに発表要項を提出しなければならない。担任や科学研究担当の先生も協力すると言ってくれたけど、上手に発表できるかぼくには不安しかなかった。

発表要項は写真やグラフも入れてまとめるのでぼくだけではできない。お母さんと一緒に考えながら作っていった。でも、お母さんは理科が苦手だ。分からないことは本で調べたり、理

科に詳しい先生に聞きに行ったりした。正直そこまでしなくてもと、ぼくは思ったけど、

「もらった機会は大切にしないとね。」

と、忙しいのに少しうれしそうだった。

何とか発表要項は間に合った。次は発表の準備だ。パワーポイントの資料を作り、それに合わせて発表原稿を考える。発表時間は十分以内なので、計りながら説明を調整した。

発表一週間前にやっと原稿が完成し、いよいよ発表練習に入った。自分では記憶力が良い方だと思っていたけど、それはちがっていた。わずか十分の発表を何回練習したら覚えられるのか、気が遠くなった。でも、研究した内容を伝えなければ意味がないと思い練習を重ね、ほぼ間違えずに言えるようになった。発表の三日前には学校の先生の前で予行練習もした。

「よく覚えたね。すごいね。」

と言って、どの先生もほめてくれた。これなら本番もきっと大丈夫だろうとぼくは思った。

その後も毎日練習した。でも、なぜかお母さんはちがうと言っては毎回色々注文をつけてくる。何がちがうんだろう。よく分からない。とうとう発表前日になった。

またお母さんが

「もう一回練習してみようよ。しっかり一言一言ゆっくり言ってみたら。」

と言ってきた。つかれていたのもあって、

「もう覚えたし、大丈夫だから。」

と、ぶっきらぼうに答えた。すると、お母さんが、

「のりは、たまたま選ばれただけなのよ。」

と、大きな声でどなった。こんなにがんばって研究して、練習もしているのに、それがたまたまだなんてひどすぎると思った。なみだが止まらなくてとなりの部屋に閉じこもった。

お父さんが帰ってきた。お母さんから話を聞いたのだろう。部屋に入ってきた。

「のりは発表の機会をもらったんだよ。他の人でもよかったのにね。それに、多くの人が助けてくれているだろ。お母さんはその気持ちに応えてほしいと思っているんだ。きびしい言い方をすれば、この研究はだれでもできる研究さ。でもなぜこの研究をしようと思ったのか、どうなったらいいと思ったのか。それはのりの言葉でしか伝えられないんだ。」

お父さんの言葉がぼくのむねにつきささった。自分だけの発表

じゃない、まちがえずすらすら言うだけでは何も伝わらないということをお母さんは言いたかったのだと思った。最後の練習を家族三人でした。話す姿勢、声の大きさ、礼の仕方も気をつけた。お母さんは時々うなずきながらだまって聞いていた。

そして発表の日。ぼくは全力で発表した。ぼくの思いが伝わったかどうか分からないけど発表後の講評で審査員の先生が、

「みんなの生活に役に立つものを作りたいという気持ちは、もう立派な科学者ですね。」

と言ってくれた。とてもうれしかった。

大学からの帰り道、お母さんが、

「今までで一番の発表だったよ。すごく伝わった。良かった。本当に良かった。」

と何度も言っていた。お母さんは少し泣いていた。ぼくはやっぱり家族は良いなと思った。